帝京ロンドン学園
Teikyo School UK
Framewood road,
Wexham,
Buckinghamshire
SL2 4QS

Teikyo School United Kingdom Newsletter

学園通信

2022 年度 3 月号
・ホームページ
https://www.teikyofoundation.com/
・連絡先
teikyo.school@teikyofoundation.com

第 31 回卒業証書授与式

3 月 7 日（火）卒業証書授与式が行われ、31 期生 10 名が学園を巣立っていきました。今年度の卒業生は、在学期間中にコロナウイルスによる休校やオンライン授業を経験し、また学園生活においても多くの規制がありました。学園でのさまざまな経験とイギリスで過ごした日々を将来の糧とし、これからの大いなる活躍を祈っています。

KO2 Charity Event

As part of their work experience program, Ko2 students planned and arranged a charity fundraiser for the children's charity, 'Make A Wish.'' The students had a talk last year from one of the charity's representatives who informed the students of the work the charity does, who they help, and how they raise money. The students decided to hold a bake sale and sold the cookies made in home - economics class to staff members and students at teatime. As well as the bake sale, the students organized a lesson swap event in which the teachers were asked to teach one another's classes instead of their own: The English teachers taught science and home economics, and the science teacher taught music... The teachers put on some very creative lessons, and the students had a lot of fun. All in all, the students raised a total of **£123.21** for 'Make A Wish.' Well done everyone! (Greg)

スキー研修旅行作文コンテスト

研修旅行での経験や感じたことを言葉におこすことは、記憶をより鮮明に残すだけではなく、形のないものを表現する作業であり、対人関係をより円滑におこなう助けになると考えています。同時に、解釈する、描写する、説明する、説得するといった言語スキルの育成にもなります。今回も国語科の授業の一環として、スキー研修旅行後に生徒に作文してもらい、その作文を教員全員で審査しました。最優秀賞の生徒の作文を以下に載せます。また、上位者は終業式にて表彰をいたしました。（谷地舘）

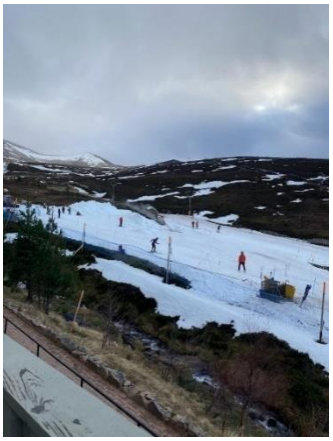
１年　最優秀賞

私たちがスコットランドで目にした山はまるで白い花が点々と咲いたようだった。2022 年が始まったばかりの一月、私たちはスコットランドにスキーをしに行った。私にとって初めてのスキーで、わくわくとドキドキで胸がいっぱいだった。

そして待ちに待った、スキーレッスンが始まった。まずは、スキー板で進む練習からだった。私はローラースケートのような感覚だと思っていたが、まるで違っていた。ローラーシューズと違い、靴の前後部分に板があることで足を簡単に動かせない上に重いので上手く前に進めなかった。しかし、インストラクターの丁寧なアドバイスのおかげで一日目の午後にはある程度滑れるようになった。

滑ることにも慣れた二日目、先生がジャンプをしてみようと皆に声を掛けた。先生が指さす方向には、雪でできた、小さなこぶのようなものが出来ていた。板を履かないで跳ぶことは簡単そうであったが、板を装着している今の私にとってはとても大きな勇気が必要であった。私は、心臓がどくどくする音が聞こえてくるほど跳ぶことが怖かった。跳んだ後に転んでしまわないか、失敗してしまわないか、考えただけでも恐怖心が自分を襲った。

それでもせっかくなら、とジャンプに挑戦することにした。はじめはもちろん上手くいかず、恐怖からジャンプする直前でこぶを避けてしまったり、勢いが足りずこぶを乗り越えられなかったりした。そんな私を見かねた先生は、スキー板を真っすぐにして勢いを出すと跳びやすいこと、一回跳んでしまえばきっと恐怖心は消えることを伝えてくれた。



アドバイス後、いざ私が跳ぶ番になった。アドバイス通り、板を真っすぐにして勢い良くこぶに向かって滑り出した。びゅんびゅんと私の耳を風は切っていく。一瞬ふわっと体が浮く感覚がそこにはあった。そして気づいたら着地をしていた。跳んだ。私は跳べたんだ。その自覚をするまでに少し時間が掛かった。

私はこの経験を通して自分に自信が付いた。はじめは怖くてできなかったことでも勇気を出してやってみることで出来るようになった。この経験は今後何かに挑戦する際、自信がない時のかてとなるだろう。

2 年　最優秀賞

カチ、パチン、カチ、パチン、繰り返すこと計 6 回。2 日目の刺さるような暗い寒さから一変し、やわらかい日差しがゲレンデを照らしている最終日。とは言え、ここはスコットランド。わずかに肌寒さが残っているような気もしたが、最終日！という安直な高揚感からだろう、ほんの少し暖かいようにも感じた。ブーツを締める作業にも慣れてきたところなのになあ、なんて思いながら悲鳴をあげている脚を強引に動かす。そんなわたしと裏腹に、慣れた手つきで(脚つき、と言うべきだろうか)白ヒョウのようにゲレンデを駆け抜け、白うさぎのようにぴょん、とラクダのコブのような山を飛び越えているクラスメイトたち。彼らを横目に、今度は紐リフトにしがみついてずるずる、ずるずると坂の上を目指した。

なだらかな傾斜の上に、スキー板のサイドを食い込ませてピザを作る。板をスライドさせて、風に乗って、ぴょんと飛び越えるだけ。たったそれだけなのに、山に突っ込んでしまうかもしれない、勢い余って谷底まで落ちてしまうかもしれない、恐怖や不安で脚が竦む。ずるり、バランスを崩し不安定なまま小さな山へと向かってしまう。No pizza！No pizza！と後ろから声が聞こえ、慌ててまっすぐにし山へと方向転換。スキー板の前方がふわ、と浮き地面に着地するも重心は既に後ろへ傾いている。まずい。どす、と尻餅をつき凄まじい勢いで谷底へと向かう身体。どうしようもなく、悲鳴しかあげられないわたしはインストラクターのジョーに突っ込んだ。ほんの数センチ横を滑り落ちていれば、恐らく今ごろは谷底だっただろう。

また勢いよく滑り落ちてしまうかもしれない、という恐怖から紐リフトに手を掛けることができない。雪の上に座り込んでしまったわたしの後ろで、クラスメイトは軽々と山を超えている。じくじく、地面から無機質な冷たさが刺さる。負けてられない。

紐リフトを再度握る。ぐぐぐ、と持っていかれそうになるところを我慢。坂の上に到着し、ひとまず深呼吸。重心は前にかける、No pizza 、No pizza、もはや呪文と化したそれを脳内で繰り返しているうちに、わたしの番がやってきた。力みすぎず、白ヒョウとまでは行かずとも、風のようにゲレンデを駆け抜ける様子を想像する。今度こそ、今度こそは、山をぴょんと飛び越えることができるだろう。

時間にしてわずか数十秒。浮遊感と恐怖がわたしを取り巻いた刹那、冷たく澄んだ空気がやさしく頬を撫で、ざく、ざざざ、とスキー板が着地する音がした。